

人のぬくもりとふれあいが奏でる躍動のまち 丹波高原文化の郷 ● 京丹波

京丹波

No.47

2009年
9月15日発行

京丹波の夜空を彩る
大輪の花火

丹波高原文化の郷づくり

Special Edition

同志社大学が京丹波町に提言

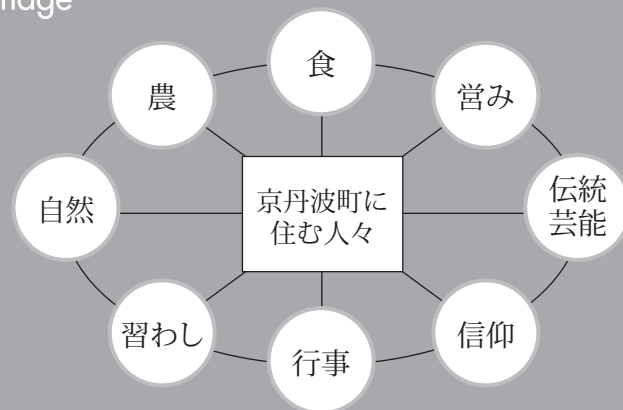


まちの将来計画「京丹波町総合計画」の基本構想（平成十九年三月策定）に掲げる十年後のまちの将来像「人のぬくもりとふれあい」が奏でる躍動のまち 丹波高原文化の郷●京丹波。本町は昨年度、この将来像の重要なキーワードである「丹波高原文化」についての調査・研究事業を、同志社大学政策学部・井口貢教授のゼミナール（井口ゼミ）と連携して展開しました。

同事業は、まちの将来像を町民のみなさんが共通認識として持つよう、「丹波高原文化」を大学の「人材」や「知」、「外の視点」による考察をもつて定義することや、「丹波高原文化」を活用したまちづくりの展開手法の調査・研究などを目的として行ったもので、今年三月には井口ゼミから、約一年にわたる調査結果をまとめた「京丹波町―丹波高原文化―二〇〇八年度調査・研究事業報告書」が京丹波町に提出されました。

今回の特集では、同報告書をもとに学生たちの瞳に映る京丹波の姿や調査に協力した町民の声、井口教授の提言などを交え、「丹波高原文化の郷づくり」をめざす京丹波町の、今後のまちづくりのあり方を考えます。

丹波高原文化のイメージ図 image



「京丹波町―丹波高原文化―2008年度調査・研究事業報告書」から



今月の表紙

りんご飴や金魚すくいなどの屋台が立ち並び、多くの人でにぎわう「夏祭り」。今年もたんば夏まつりでは、夏の夜空を鮮やかに彩る花火が打ち上げられ、訪れた人々を幻想的な世界へ引き込みました。
(関連記事を16ページに掲載)

◎井口ゼミが考察した「丹波高原文化」の定義

生活の中に存在するもの

京丹波の魅力を探った。豊かな「食」と「自然」。いにしえの心息づく「伝統芸能」や「行事」。また、食と自然を結ぶ「農」や、自然と行事の間に存在する「習わし」、伝統芸能と行事にある「信仰」、そして昔からの営みの中ではぐくまれる食と伝統芸能に存在する「営み」という要素。いずれも今までの生活の中で培われてきた。

キーワードは「人」

これら8つの要素の中に、「人」もはっきりと定義することが重要。すなわち、自然をうまく活用し、この地に食を根づかせたのは「人」であり、伝統芸能や地域の行事を守り支えているのは、まぎれもなく「人」である。人を介して8つの要素が有機的に結びつけられることで丹波高原文化が構成される。

まちづくりの核に

以上のことから丹波高原文化は右上の図のとおり。重要なのは8つの要素を円で結ぶだけでなく、中心に「人」を位置づけて、各要素を支えるというイメージをはっきりとさせることである。8つの要素を「人」が中で支えることにより崩れにくい構造となるのである。こうした揺るぎないイメージは、「丹波高原文化」をまちづくりの核として、ビジョンをつくる作業において重要である。

同	志	社	大	学	が	
京	丹	波	町	に	提	言

Special Edition

丹波高原文化の郷づくり

同志社大学連携事業「丹波高原文化調査・研究事業」



伝統芸能



信仰

営み

自然

農

食

習わし



行事

祇園八坂神社・御田祭



わたしたちは見つけた！
京丹波が持つ、揺るぎない「個性の核」の存在を。

広報 京丹波 No.47 CONTENTS

- 2 **丹波高原文化の郷づくり**
Special Edition 同志社大学が京丹波町に提言
- 12 [シリーズ]和知診療所の方向性
- 13 新型インフルエンザに備えて
- 14 Dr's Message いきいき健康術
- 15 **フラッシュ** TOWN NEWS 2009
英語に親しむ機会を
—新ALTとしてメリンドさんとジョエンさんが来日
交通網整備の充実を目指して
—三促進協議会
人権について考える機会を
—街頭啓発と「ひゅーまんシネマフェスタ2009」を実施
- 16 夏祭り



Interview

フィールドワークに協力した
永田隆郎さん(56)

ながた・たかお

平成3年に京都市から移住。現在、
松山公民館職員として活躍。大朴在住

魅力の生かし方、外への発信がカギ。

同志社大生のみなさんの調査に役立てればと思
い、まちづくりへの思いなどをお話しました。こうした
取り組みを次のステップにつなげていくためにも、調
査結果を提供し、町民で共有することが大切でしょう。

この地に移り住んで18年。田舎の不便さを差し引
いても、この住環境は魅力的です。山・川でのいろん
な体験を子どもたちに与えられる環境や豊かな産品
など、このまちの個性をどう生かすか、魅力の部分
をいかに外へ発信していくかが、これからのまちづく
りには重要ではないでしょうか。



Interview

ワークショップに参加した
文字倭子さん(75)

もんじ・しずこ

旧和知町婦人会長などを歴任。
現在、町消費生活グループ役員
として活躍。本庄在住

まちを見つめなおす良い機会になった。

同志社大生のみなさんとのワークショップは、すべ
てが新鮮なものでした。わたしたちが日ごろ何気なく
見ている風景や当たり前すぎて意識しないものが、
学生のみなさんには「魅力」として映っている、そうし
た「外の視点」や柔軟な発想にふれられたことはとて
も新鮮でしたし、住んでいるまちを見つめなおす良
い機会になりました。町民の一体感をはぐむため
にも、こうした旧町の枠を超えて多くの町民が一
堂に会ってまちづくりを語りあえる場や交流の機
会を積み重ねていくことが大切だと思います。



ワークショップ「京丹波の魅力～同志社大生と語ろう～」で、京丹波町の魅力について話しあ
う大学生と町民のみなさん。(旧須知小講堂、須知)



ワークショップでは、住民の視点と学生たちの「外からの視点」によって、地域の魅力を生か
すさまざまなアイデアが出されました。最後はグループで話しあった内容やアイデアを発表
し、参加者で情報を共有しました。

まちを歩き 人と出会い 築いた 定義の礎

同志社大・井口ゼミは、「丹波高原文化」の定義を導き出すまでに、大学での調査・研究はもとより、京丹波町のフィールドワーク(現地調査)や、町民との座談会(ワークショップ)を通して、まちの現状や魅力・課題などの情報収集に力を注ぎました。定義の礎はまさに、学生たちがまちを歩き、町民と出会い、共に語りあって築かれたものです。

大学生と京丹波町民、交差する内外の視点。

Tomoya Satou

まちの魅力のPRに、
もっと力を。

佐藤朋弥さん

(政策学部・4年、北海道出身)



「机の上だけの勉強ではいけない」ということに気づく
ことができた今回の調査は、大きな経験になりました。京丹
波町には新鮮な農産物などさまざまな魅力があるので、外
へのPRにもっと力を入れるべきだと思います。

Shiho Okumura

京丹波に愛着わき、プライ
ベートで立ち寄ることも。

奥村紫芳さん

(政策学部・4年、京都市出身)



1年間調査して、京丹波町に愛着がわいてきました。友
人と近くに来たときには「いい場所あるから」と誘って、道
の駅にぶらり、立ち寄ることもあります。これからのまちづく
りは「あるものをどう生かすか」が重要だと思います。

S housuke Yagi

人びとの「つながりの強さ」、
表に見えない魅力を知った。

八木翔介さん

(政策学部・4年、岐阜県出身)



ワークショップを通じて京丹波の人の「つながりの強さ」
を感じました。いろんなコミュニティーで人がつながって
いるんだなど。時代が変わっても「変わらずそのまま」ある
べきものが、まちづくりには必要だと思います。

T amaki Ohyama

都会にはないもの、磨けば
光る魅力がたくさんある。

大山 環さん

(政策学部・4年、大阪府出身)



町民のみなさんのまちへの愛着の強さを感じた一方で、
都会にはない魅力がたくさんあるのに、それを実感してい
る人は少ないと感じました。自然の中で生きていることを
プラスに変えていくことが大切だと思います。

町民と学生、互いに
刺激しあえた調査過程

一年間の調査の中で、フィールド
ワークを重ねた井口ゼミ。昨年五月
三十一日と六月四日に行ったフィー
ルドワークでは、道の駅や観光スポ
ット、重要文化財などの見学や各分
野で活躍している町民にインタビュー
を通じて京丹波町の魅力を調査。そ
後、八月二十九日に行ったフィー
ルドワークでは、農業や商業、福祉、教育
など各分野で活躍している町民から
現状や課題、今後の展望などを聞き
ました。学生たちはフィールドワー
クから、京丹波町ならではの活用可
能な資源が十分に存在していること

各分野の現状課題をつかみました。
次に井口ゼミは、自分たちの「第三
者視点」の考察に、実際に地域で暮
らす住民の「内なる視点」を加え、まちの
新たな側面を見いだしていこうと十
月五日、歴史の薫り漂う旧須知小講
堂で、ワークショップ「京丹波の魅力」
同志社大生と語ろう」を開催。学生と
町民がそれぞれの視点からまちの誇
れる宝物をあげ、その活用方法につ
いてアイデアを出していました。

学生たちの柔軟な発想や視点に
ふれた町民。また、町民の地域への思いや
愛着の強さを感じとった学生たち。互
いの考え方や思いに耳を傾けながら、
熱心に語りあう双方の目は本当に輝
いていました。



フィールドワークの様子。農家や商工業者、学校、各種団体、
ターンの町民などから現状や課題、まちづくりへの思いなど
を聞きました。(上は三ノ宮小周辺、下は大迫にある飲食店内)



Interview 池田優衣 × 元井雄大 × 郭育仁



学生たちの瞳に映る 丹波高原文化

丹波高原文化の調査研究事業において、井口ゼミの先頭に立って引っ張った3人の大学院生。果たして、調査を通じて3人の瞳に、魅力や課題など京丹波町の姿はどのように映ったのでしょうか。



「ソトモノ視点」を、
まちを見つめなおす
きっかけに。

いけだ・ゆい
同志社大学大学院総合
政策科学研究科。
(京都市出身)

京 丹波町の強み―それは「都会に近い田舎」。例えば「農業」。都会では土にふれる機会すら少ないものですが、京丹波に行けば本当の土に、森にふれることができる。「食育」もそう、京丹波でなら実際の畑で栽培されているところから教えられるんです。京丹波を訪れる意味や目的を持っているなら、京丹波だからこそ実現できることがたくさんあって、しかも都市近郊でそうした環境があるというのは魅力です。

今回、わたしたちがまとめた報告書が、京丹波町のまちづくりのひとつのきっかけに、大学生のいわゆる「ソトモノ視点」が、町民のみなさんが改めてまちを見つめなおすきっかけになればと思います。



実は元気なまち。
大切なのは魅力の
再認識と発信。

もとい・たけひろ
同志社大学大学院総合
政策科学研究科。
(神奈川県出身)

豊 かな食があり、里山があり、いろんなものがあるけれど、つかみどころがない。これが京丹波町の第一印象でした。しかし、調査していく中で見えてきたものは「磨けば光るもの」が多くあるということ。どこにも負けない魅力がありながら、アピールできていないだけで、実は元気なまちであり、さまざまな可能性を秘めたまちなのではないかと思えました。二年間調査に携わり、今、京都市で暮らしていると、京丹波産のものを目にするのが多くあります。だからいかに認識させられるか、そこに住んでいる人びとが地域資源を再認識し、「京丹波ならではのもの」として誇りを持って発信していけるかが大切ではないでしょうか。



お年寄りの
知恵や技術を、
まちづくりに。

かく・いくじん
同志社大学大学院総合
政策科学研究科。
(台湾出身、留学生)

学 習のすばらしい土壌を与えていただいた京丹波町に感謝しています。多くの町民のみなさんと出会い、さまざまなお話を聞かせていただき、教えられることが多くありました。特に印象に残っているのが、お年寄りの知恵や技術です。フィールドワークを通じて、京丹波の過去・現在を貫いたお年寄りの知恵が、「農業」や「食」などさまざまな分野で息づいていることを知りました。「高齢化」という要素はまちづくりに対して、しばしば「危機」や「マイナス要素」としてとらえられていますが、弱みではなく「強み」にしていく、お年寄りの知恵や技術をまちづくりに生かしていくことが大切だと思います。

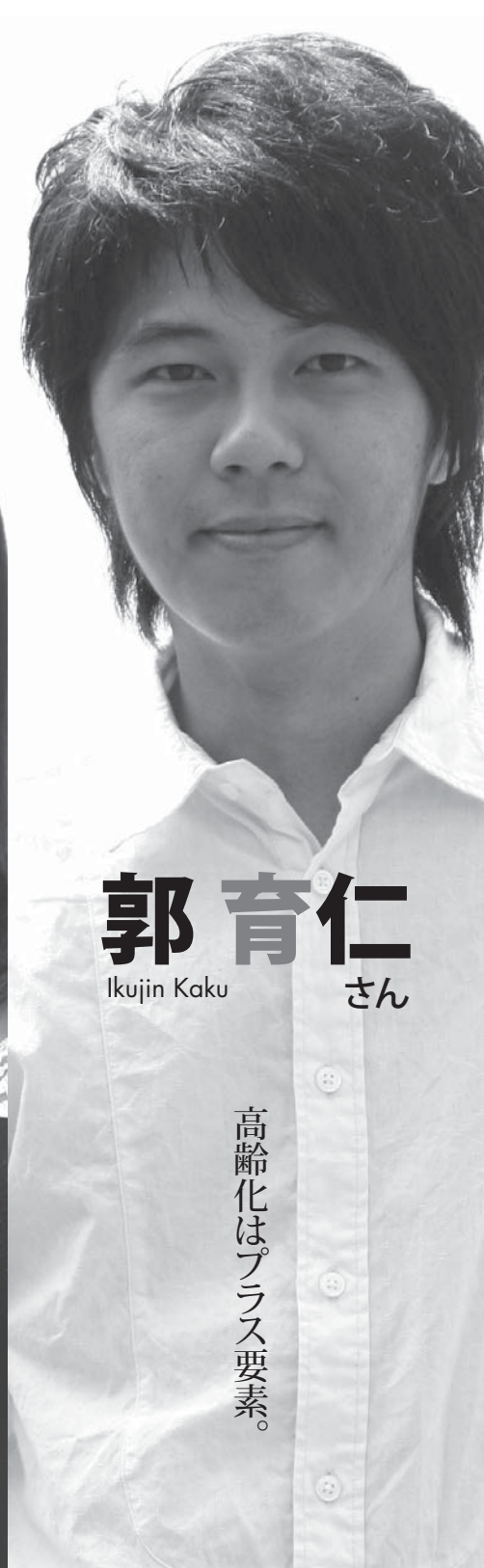


秘めた可能性は大きい。

元井雄大
Takehiro Motoi さん



そこには「ほんもの」がある。



高齢化はプラス要素。

郭育仁
Ikujin Kaku さん

丹波高原文化の郷づくり のキーワード

京丹波町総合計画に掲げる将来目標像の中のキーワード「丹波高原文化」とは一体どういうものなのか。「丹波高原文化の郷づくり」というのは、どんなまちづくりをめざしていくことなのか。

学生たちと共に京丹波町を見つめてきた井口貢教授が、報告書に示した「丹波高原文化の定義」の本旨と、それを活用した今後のまちづくりのあり方を熱く語ります。

◆ 同志社大学政策学部 教授

井口 貢 さん

Doshisha-Univ ● Mitsugu Iguchi

地域資源を見つめなおし、
京丹波ならではのもの、
すなわち「丹波高原文化」として
誇りを持って、自信を持って発信し、
この地で暮らすことの価値を高めていく、
それが、「丹波高原文化の郷づくり」なのです。



道の駅「和」朝市

丹波高原文化は、「第六次産業的」な文化

京丹波町には多様で豊富な地域資源が存在しています。前述のイメージ図(2ページ)に示した自然や食、農など八つの要素がそれぞれ、これらの要素は、どれ一つ欠かすことのできない「丹波高原文化」の重要な構成要素なのです。しかし、それぞれの要素は必ずしも結びついていない、だから個々バラバラ

三次産業を融合した「第六次産業」的な文化が「丹波高原文化」ということになります。そして、農・自然・食・伝統芸能・行事などそれぞれの要素を担い、築きあげてきたのは「人」であり、中心にしっかりと「人」を位置づける、「すべての基本は『人』であり、『人』を介してそれぞれの要素は結びつけられるものなのである」というのが、わたしたちが考察した「丹波高原文化」の定義です。

紡がれてきた「旋律」を揺るぎない「主義」へ

「丹波高原文化の郷づくり」は、京丹波の人びとが地域資源を見つめなおし、まちの個性(アイデンティティ)としてみんなで共有していく、そして外へ発信することで価値あるものにしていくという概念です。

みの中で築かれてきた京丹波の独特のものがあり、「自然」にも、高原という場所はほかにもありますが、京丹波ならではの高原風景があるはず。そういう営々と築かれてきた京丹波ならではの「リズム(旋律)」を、誇りを持って外へ開くことで、揺るぎない、どこにも負けない京丹波の「リズム(主義)」になるのです。

「里豆霧」も「居住夢」も当て字ですが、内なる誇りを、自信を持って外に開き、夢を持って住み続けられる場所にしていく、それが「京丹波里豆霧」を「京丹波居住夢」へ。丹波高原文化の郷づくりをめざす京丹波町のまちづくりに対するわたしたちの提言です。

京丹波「里豆霧」を、 京丹波「居住夢」へ。



丹波自然運動公園

ラな状態にあるものを有機的に結びつけたものが「丹波高原文化」ということになります。

では、有機的に結びつけるというのはどういうことなのか。丹波高原文化は「農」や「食」など第一次産業的なイメージとしてとらえがちですが、第二次産業である加工や第三次産業である流通を含めての「農」であり、「食」である、そして「行事」や「伝統文化」などほかの要素とも関連づけていく、すなわち第一次産業、第二次産業、第

今の暮らしは当然、長い歴史の中で紡がれてきたもの。だから、これから先の何百年のまちづくりは、過去の何百年を置き去りにしては語れません。すなわち、過去から築かれてきたものを大切に、地域資源として活用するからこそ、未来にわたる「持続可能なまちづくり」というものがあるのです。「食」にも「農」にもこれまでの営

◎Profile

いぐち・みつぐ

昭和31年滋賀県米原町(現・米原市)生まれ。同志社大学政策学部教授。専攻は文化政策学など。主な著書は「入門・文化政策」ほか。



丹波高原文化の郷づくり

Special Edition 同志社大学が京丹波町に提言



見つけましょう、
このまちに生きる揺るぎない価値観を。
そして、次代に伝えましょう、
このまちで生きていくことのすばらしさを。

丹波高原文化の郷づくりは、 わたしたちの生き方の理念。

合

併四年―。このまちに住む、どれくらいの人びとが京丹波町としての一体感を感じているでしょうか。このことについて調査に携わった学生たちは、こう指摘してくれました。「三つの地域(丹波・瑞穂・和知)それぞれには輝くものがあつて、いいものがあるけれど、ひとつの町としての一体感はあまり感じません」と。では、京丹波町として一体感をほぐくむために何が必要なのでしょう。「それは時が解決してくれるもの」ではなく、京丹波町民として共有できる、共通認識として持てるものが必要だと思ふのです。井口ゼミの報告書のおわりにこう綴られています。「合併を具現化した新町にとつての新たな大きな課題は、いかにしてその文化的アイデンティティ(個性)を構築するかということではないだろうか」と。

この丹波高原文化調査・研究事業の意義はまさに、京丹波町民が共有できる地域アイデンティティ

丹

波高原文化の郷づくり。それは、京丹波町民であるわたしたち一人ひとりの生き方の理念。丹波高原の大地で、その豊かな自然の潤いに抱かれた暮らしたに喜びや価値を見だし、この地で誇りと自信を持って生きていくという理念なのです。「魅力をなくしている地域というのは、先人から脈々と受け継がれてきたものを失いかけている」。これは井口教授の言葉。地域社会が、いわば「逆境」にある今だからこそ、京丹波で生きる揺るぎない価値観をしっかりと持ち、そして、次代に伝えていきます。このまちで生きていくことのすばらしさを。

波高原文化の郷づくり。それは、京丹波町民であるわたしたち一人ひとりの生き方の理念。丹波高原の大地で、その豊かな自然の潤いに抱かれた暮らしたに喜びや価値を見だし、この地で誇りと自信を持って生きていくという理念なのです。「魅力をなくしている地域というのは、先人から脈々と受け継がれてきたものを失いかけている」。これは井口教授の言葉。地域社会が、いわば「逆境」にある今だからこそ、京丹波で生きる揺るぎない価値観をしっかりと持ち、そして、次代に伝えていきます。このまちで生きていくことのすばらしさを。



第2回 地域に根差した施設運営を目指して

地域のみなさんの健康を守るために運営している和知診療所。本年10月1日には、町内医療施設の役割分担と連携を基本として、病床すべてを「介護療養型老人保健施設(以下「療養型老健施設」)」に転換します。今回は、療養型老健施設への病床転換に向けた医師やスタッフの思いをお伝えします。



■療養型老健施設の開設に向けて準備チームで検討

町は、療養型老健施設の開設に向けて、和知診療所と地域医療課、保健福祉課の職員で準備チームを組織し、医療と福祉・介護が連携した仕組みづくりのために準備を進めています。

準備チームでは、和知診療所が従来の外来診療を維持しつつ、高齢者の在宅復帰を目指した支援と在宅生活を支える介護機能を担えるように、地域に根差した施設運営を目指して検討を重ねています。

医療と介護の両面から町民のみなさんの健康と暮らしをサポートするために、病床転換を間近に控えた現場の声を届けます。

いよいよ、療養型老健施設の開設の日が近づいてきました。病床の形は変わりますが、従来にも増して、患者さんやその家族の方をはじめ、地域のみなさんと心が通い合い、信頼される「かかりつけ診療所」でありたいと思います。

常勤医師一名体制となり、診療所のできることは限りがありますが、国保丹波波町病院をはじめ、協力医療機関との連携ネットワークを活用し、その人に必要な医療と介護を一体的に提供できるように努めたいと思います。

そして、地域のみなさんから応援してもらえそうな施設となるよう、全職員が一丸となって一生懸命取り組んでいきますので、今後ともよろしく願います。



なかむら やすなり
中村 泰也 所長



おおた ゆうじ
大田 有次 理学療法士

療養型老健施設には、病院と在宅の「中間的施設」としての役割があり、一人ひとりの状況に応じた個別メニューで看護・介護を提供します。

開設後は、みなさんが安心して利用していただけるようスタッフ一同、新たな気持ちで取り組んでいきます。



よねやま えいいち
米山 栄一 看護師長

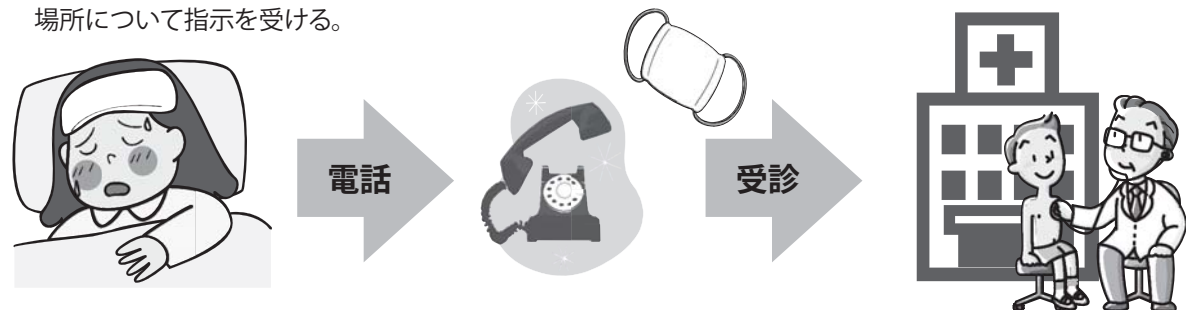
第2回 新型インフルエンザに備えて

全国的に感染が拡大している「新型インフルエンザ」。このコーナーでは、新型インフルエンザへの対策など、いざというときに備えた情報をお伝えします。

「インフルエンザかな」と思ったら

受診方法

①発熱などにより医療機関を受診する時は、かかりつけ医療機関などに必ず事前に電話をかけて、診察時間や場所について指示を受ける。



②受診の際は、マスク(不織布推奨)を着用し、手洗いをこまめにする。マスクがない場合は、せきエチケット(ハンカチを口元にあてるなど)を心がけ、他の患者と離れたところに座る。

※医療機関までは、公共交通機関の利用を避けて、できるだけ自家用車などを利用してください。

新型インフルエンザと診断されたら

自分自身について

- 軽症の方は、他の人への感染を予防するために、医師の指示に従って症状の始まった日の翌日から7日間、自宅療養をする。入院は重症の方のみ。
- 自宅療養中に**重症化の兆候があれば、医療機関へ相談し、受診する。**

*重症化の兆候とは:3日以上の発熱、顔色不良、呼吸困難、胸の痛み、意識障害、脱水、けいれんなど

- ※持病がある方は重症になる可能性があるため、主治医に相談し、指示を受けてください。
- ※自宅療養している際のご質問などは、新型インフルエンザ相談窓口にご相談ください。

重症化するリスクの高い方

- 次の持病などがある方
慢性呼吸器疾患(ぜんそくなど)、慢性心疾患、糖尿病、人工透析中、免疫機能不全(ステロイド内服中)のある方。
- その他
妊婦、乳幼児、高齢者。

患者の同居者について

- 外出は控える。
- 発熱などの症状があれば、医療機関に事前に電話をして、速やかに医療機関で受診する。
- 持病がある方は、念のためにかかりつけ医に相談する。

かかりつけ医がなく、受診先がわからない時や自宅療養について相談したい時は

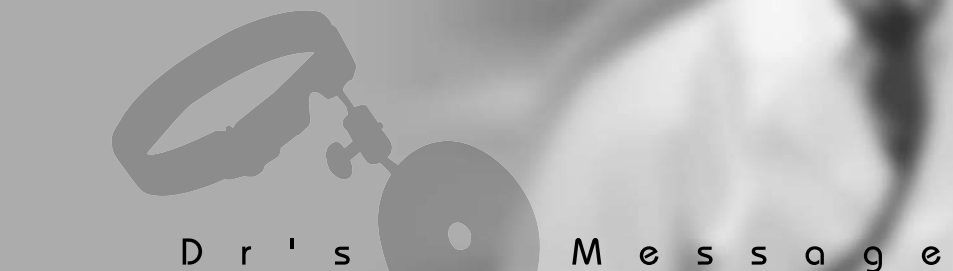
南丹保健所 新型インフルエンザ相談窓口 [対応時間 8:30~17:15]
☎0771-62-2979 ☎0771-62-4751(代表)

最新の情報はホームページで
■厚生労働省 <http://www.mhlw.go.jp>
■京都府 <http://www.pref.kyoto.jp/shinflu/>



問い合わせ先

保健福祉課
☎86-1800



いきいき健康術 第25回

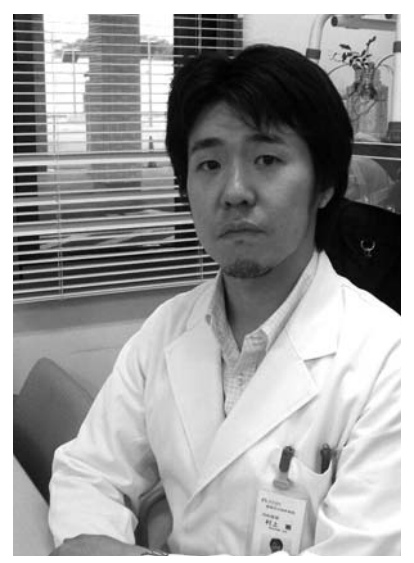
「脱水症に気づいて」

このコーナーは、町立病院・診療所の医師や専門職員がみなさんにお届けする健康情報コーナーです。今回の担当は京丹波町病院の内科医師 村上憲先生。暑い時期に起こりやすい「脱水症」についてのお話です。

脱水 水という言葉をよく聞かれると思いますが、どういう状態かご存じですか。一言で言うと、体内の水分(体液)が不足した状態ですが、体液には水分と電解質(ナトリウム、カリウムなど)が含まれており、失われる体液の中で、水分が多いか、電解質が多いかで症状に違いがあります。水分不足による脱水は、水分摂取量が少なかったり、発汗などにより多量の水分を失った場合に起こります。この場合、口が渇く、尿が減るなどの症状があります。一方、嘔吐・下痢などによって起こる脱水は、電解質の欠乏が主な原因であり、口の渇きはあまり感じず、尿量も保たれています。

そのため、脱水症は水分不足のみが原因ではなく、電解質の不足によっても起こる可能性があり、実際に入院される患者の中にはきちんと水分を摂っていた方も少なくありません。

症状があれば早めの受診を心がけて
脱水症が重度化すると、意識障害や精神障害をはじめ、血液が粘稠になることで脳梗塞や心筋梗塞を引き起こすことがあり、突然死の原因につながる恐れがあります。特に、高齢者や乳幼児は注意が必要です。治療が遅れると危険な状態になる可能性があるため、次のような症状があれば、早めに医療機関で受診してください。



内科医師 村上憲先生(京丹波町病院) [専門: 膠原病内科]

- 《脱水を疑う症状》
- 強い口の渇き。
 - 尿量の減少。
 - 夏場に皮膚(脇の下など)が乾燥している。
 - 立ちくらみがする。
 - 爪を押したとき白くならない。
 - 頭痛めまいがする。
 - 強い脱力感がある。
 - 意識がもうろうとする。

脱水症を予防するには

脱水症の予防で大切なのは、水分とともに電解質を補給することです。多量の発汗があるときや、嘔吐・下痢などが強いときの水分補給は、水やお茶よりも電解質が多く含まれるスポーツドリンクなどが効果的です。また、ぎりぎりまで我慢せず、こまめに水分を補給することが大切です。脱水症を起こさないよう十分に注意して生活してください。

国保京丹波町病院では、毎月の第二・第四土曜日の午前中に内科と小児科の診療を行っています。
(電話) 86-0220

[用語説明] 粘稠:ねばりけがあつて濃いこと。

英語に親しむ機会を

新ALTとしてメリンダさんとジョエンさんが来日

新しいALT(外国語指導助手)として、アンタラミアン・メリンダ・ケイさん(アメリカ合衆国出身)が七月二十六日、カン・ジョエン・チャオアさん(ニュージージーランド出身)が八月二日に来日。これから一年間、町内の小中学生を対象に英語を指導します。

メリンダさんは、オードリーさんの後任として、和知・浦生野中学校や丹波・和知地区の小学校を担当。ジョエンさんは、ブライアンさんの後任として、瑞穂・浦生野中学校や瑞穂地区の小学校で英語を指導します。これからの思いを聞くと、「子ども



新しいALTのメリンダさん(左)とジョエンさん(右)

たちに英語を教えながら、わたしもがんばって日本語を覚えたい」とジョエンさん。また、メリンダさんは「多くのおみなさんと話をして交流を深めたいので、町内で見かけたら、日本語で気軽に声をかけてください」と話しました。

人権について考える

街頭啓発と「ひゅうまんシネマフェスタ2009」を実施

八月を人権強調月間として、全国的にさまざまな取り組みが展開される中、本町では八月六日、人権擁護委員や人権啓発推進協議会委員をはじめ、商工会や社会福祉協議会、農協などから約三十人が参加して、道の駅やJR和知駅前などで街頭啓発を行いました。

街頭啓発は、広く町民に対して基本的な人権の尊重と擁護を訴え、人権問題への理解と認識を深めることを目的に実施。委員らは、行き交う人たちに人権の大切さを伝えるとともに、人権問題



街頭啓発を行う委員(丹波マーケス前・須知)

交通網整備の充実を目指して

三促進協議会

平成二十一年度三促進協議会の理事総会が八月十九日、町中央公民館で開かれ、役員ら約四十人が出席しました。

三促進協議会は、中部地域の山陰本線複線化の早期完成を目的とした「山陰本線京都中部複線化促進協議会」(佐々木稔納会長、南丹市長)と、北陸新幹線若狭ルート(の早期着工および口丹波地域に新駅設置を目

的とした「北陸新幹線口丹波建設促進協議会」(栗山正隆会長、亀岡市長)、京都縦貫自動車道の丹波

和知間の早期完成を目的とした「京都縦貫自動車道(丹波)和知間」建設促進協議会(松原茂樹会長、京丹波町長)の三つの協議会の総称。本町と亀岡市、南丹市の二市一町の理事者や協議会議員、商工会、森林組合などの公共的団体の代表者らが委員として参加しています。協議では、それぞれの促進協議会の事務局から、平成二十一年度事業と決算報告、平成二十一年度事



理事総会であいさつをする松原町長(町中央公民館・浦生)

業計画と予算案が提案され、すべての議案が承認・可決されました。また、二年任期で行われる役員改選では、各協議会ともに正副会長留任となりました。

わたしたちの町

人口	17,030(-9)
男	8,059(-9)
女	8,971(±0)
世帯数	6,506(-1)
9月1日現在()は前年比	

職員の配置
■異動(九月日付)
山森要子(保健福祉課看護師) (敬称略)



子どもたちに大人気のカエル飛ばし大会(みずほ夕涼み大会)



祭り会場をパレードする
桜山小学校鼓笛隊(みずほ夕涼み大会)



よさこい踊りを披露する
瑞穂婦人会(みずほ夕涼み大会)

編集 後記

2回目となる夏祭りの取材。昨年と同じように祭り風景を撮影していると、「広報のおっちゃん、恥ずかしいから撮らんといて」との声が。聞きなれない「おっちゃん」の言葉に少し落ち込みながらも、声をかけてもらったことに喜びを感じる瞬間でした。▶今年の夏は、編集子に息子が誕生し、生涯忘れられない思い出の年となりました。編集子には、子どもが見せる笑顔や泣き顔、何気ない仕事などのすべてが新鮮で、時間が経つのを忘れて見入ってしまいます。新たな家族を迎え、より一層充実した毎日が過ごせるように、仕事と子育てをがんばりたいと思います。(K)

夏の風物詩として多くの人を魅了する「夏祭り」。今年も町内では、たんば夏まつり(八月五日)、みずほ夕涼み大会(八月十六日)、わちふるさと祭り(八月二十五日)が盛大に開催され、訪れた多くの人たちが夏の風情を楽しみました。

夏祭り

会場を笑いの渦に
巻き込んだ千鳥の漫才
(わちふるさと祭り)



保存会の音頭に合わせて
和知文七踊りを踊るたくさんの人たち
(わちふるさと祭り)



力強く和知太鼓を打ち鳴らす和知小学校の児童
(わちふるさと祭り)



勇壮な響きで祭りを盛り上げる和知太鼓保存会
(わちふるさと祭り)



多くの人でにぎわう祭りのメイン会場(たんば夏まつり)



屋上でカメすくいを
楽しむ子どもたち(たんば夏まつり)